

80. 高橋幸八郎の思想と実践－比較経済史学エゴ・ドキュメントアーカイブの構築と活用

福島大学行政政策学類 准教授 阪本 尚文

概要

本研究は、戦後日本を代表し国際的に活躍した経済史家、高橋幸八郎（1912-82）が、恩師・同僚らと交わした未公表書簡（高橋書簡）や遺族提供の日記などのエゴ・ドキュメント（一人称で書かれた資料）を整理・デジタル化するとともに、黎明期の比較経済史学（大塚史学）の豊かな思想的可能性を明らかにすることを目標とした。本研究の知見は次の三点にまとめられる。すなわち、通俗的なイメージには還元できない複雑な相貌をこの西洋史家は有しており、ア）トランスナショナル（朝鮮／フランス／国際学会）かつトランスローカル（東京／福井）な空間的越境性、イ）インターディシプリナリー（政治史／経済史／社会史／文化史／法学）な越境性、ウ）オーディエンス（アカデミズム／市民社会）の越境性、という三重の越境性にこそ高橋史学の特質がある、というものである。高橋が有するこれらの越境性は、比較経済史学の、これまでほとんど認識されずにきた思想的かつ実践的な側面とも言える。しかも、この比較経済史学の隠れた性格は、高橋史学が分野外の専門家や郷土の市民、そして海外の読者など、多様な読み手に受容されたこととも密接に関わるものであった。「歴史を業とする者たちの内輪での歴史の行いと、それ以外の圧倒的に多数の人びとの歴史の行いとの間、相互の了解が困難なほどに乖離が発生」（小野塚 2020）する現在にあって、両者を架橋しようと苦闘している多くの歴史家によってこそ、曙光期の比較経済史学に含まれていた越境可能性は、顧みられるべきであろう。

背景および目的

大塚久雄と並んで比較経済史研究をリードした高橋幸八郎は、福井の農村に生まれ、東京帝国大学文学部を卒業して戦時下を植民地朝鮮の京城帝国大学で過ごし、敗戦後は東京大学社会科学研究所で多くの後進を育てながら国際的にも活躍した。「ヨーロッパ近代社会成立史をめぐる日本の輝かしい研究のリーダー」（成田・安丸・山之内 2007）と評され、欧米の学界で無名な大塚よりも海外では歴史家としては高橋のほうが知られているという評価もある（近藤 1997）。だが、今日も大塚が新たな研究書の主題となっているのと対照的に高橋の先行研究は乏しい。しかし、高橋が戦後日本の人文・社会科学の脊梁をなす比較経済史学という新しい学知が誕生する現場に居合わせており、しかもその学知の性格が彼の歴史学に示されている可能性は、改めて想起されてよい。本研究は、エゴ・ドキュメントに着目する現代歴史学の潮流に棹さしつつ、高橋及びその周辺の歴史家らのエゴ・ドキュメントも活用して高橋史学を東アジアの思想史・史学史の流れの中に捉えて、戦後日本の人文・社会科学が前提としてきた理論的基盤の新たな一面やその国際的特徴を解明することを目的とした。

方法

代表研究者は、近年、高橋が1930年代から50年代にかけて送受信した未公開書簡を金沢市内の古書店で発見した（図1）。そこには師の今井登志喜や、大塚ら同世代の歴史家、そして京城帝大時代の教え子が高橋に宛てたものや、フランス留学中の高橋が日本の親族に宛て、フランス革命史家、ルフェーヴルなどとの交流の模様を記

したものも含まれる。この高橋書簡を購入・整理の上で福島大学附属図書館で公開しつつ本研究でも利用するほか、遺族提供の未公刊日記（図2）、業績目録未収録の朝鮮語の新聞記事（図3）、戦後直後に地元で発行していた同人誌などの新史料もはじめて活用した。

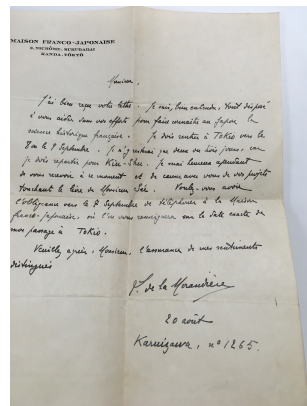


図 1.

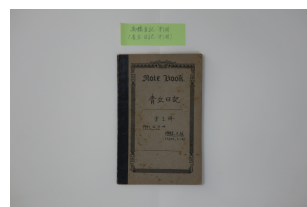


図 2.



図 3.

結果および考察

本研究の知見は次の三点にまとめられる。すなわち、通俗的なイメージには還元できない複雑な相貌をこの西洋史家は有しており、ア) トランスナショナル（朝鮮／フランス／国際学会）かつトランスローカル（東京／福

井) な空間的越境性、イ) インターディシプリナリー (政治史／経済史／社会史／文化史／法学) な越境性、ウ) オーディエンス (アカデミズム／市民社会) の越境性、という三重の越境性にこそ高橋史学の特質がある、というものである。高橋が有するこれらの越境性は、比較経済史学の、これまでほとんど認識されずにきた思想的かつ実践的な側面とも言える。しかも、この比較経済史学の隠れた性格は、高橋史学が分野外の専門家や郷土の市民、そして海外の読者など、多様な読み手に受容されたこととも密接に関わるものであった。「歴史を業とする者たちの内輪での歴史の行いと、それ以外の圧倒的に多数の人びとの歴史の行いとの中に、相互の了解が困難なほどに乖離が発生」 (小野塚知二) する現在にあって、両者を架橋しようと苦闘している多くの歴史家によってこそ、曙光期の比較経済史学に含まれていた越境可能性は、顧みられるべきであろう。なお、書簡類については、整理の上でデジタル化を行った。

(完)

発表論文

- 1) 阪本尚文「小特集 比較経済史学の思想と実践——高橋幸八郎関連未刊行書簡を中心に 趣旨説明」『歴史と経済』66 巻 1 号、2023 年、19-21 頁 (査読あり)
- 2) 阪本尚文「外交史・権利の宣言・平和主義——高橋幸八郎の政治的思惟」『歴史と経済』66 巻 1 号、2023 年、37-52 頁 (査読あり)
- 3) 阪本尚文「星董派と戦後歴史学のあいだ——西洋経済史家、岡田與好の出自」『大警視だより 続刊』17 号、2023 年、26-28 頁
- 4) 阪本尚文「1939・8・23——フランス革命史研究のはじまり」『大警視だより 続刊』17 号、2023 年、23-25 頁
- 5) 阪本尚文「高橋幸八郎の戦争——1941-1945」政治経済学・経済史学会 2023 年度秋季学術大会 (駒沢大学) ポスター報告 (政治経済学・経済史学会研究奨励賞)

引用文献

- 1) 小野塚知二 2020「読者に届かない歴史——実証主義史学の陥穽と歴史の哲学的基礎」恒木健太郎・左近幸村編著『歴史学の縁取り方——フレームワークの史学史』東京大学出版会
- 2) 成田龍一・安丸良夫・山之内靖ほか 2007「歴史家・二宮宏之を語る」『クヴァドランテ』第 9 号
- 3) 近藤和彦 1997「大塚久雄」今谷明ほか編著『20 世紀の歴史家たち (1) ——日本編 上』